

平安京右京北辺二坊八町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一二―一八

平安京右京北辺二坊八町跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京北辺二坊八町跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、集合住宅新築工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

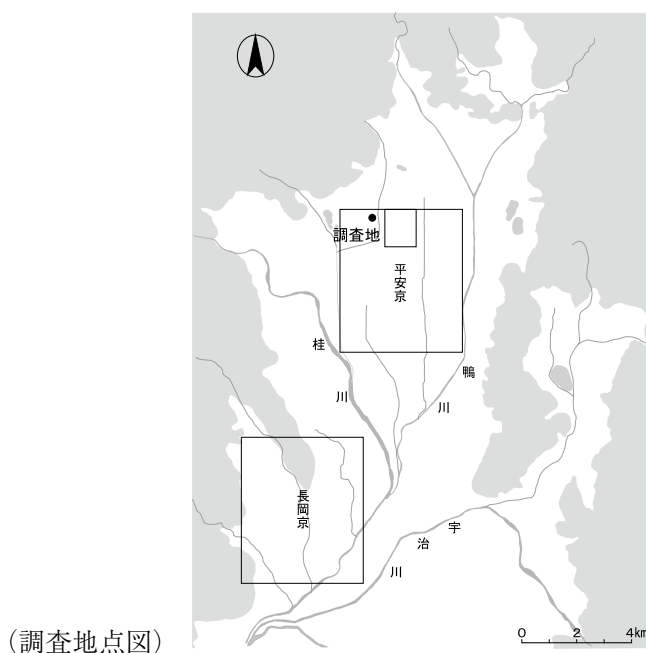
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京北辺二坊八町跡（文化財保護課番号 12 H 182）
- 2 調査所在地 京都市北区大將軍西町176番地
- 3 委 託 者 三菱地所レジデンス株式会社
- 4 調査期間 2012年11月19日～2012年12月28日
- 5 調査面積 約330㎡
- 6 調査担当者 上村和直
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 上村和直
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構の概要	6
(3) 中世以降の遺構	9
(4) 平安時代の遺構	12
(5) 飛鳥時代の遺構	14
4. 遺 物	15
(1) 遺物の概要	15
(2) 出土遺物	15
5. まとめ	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区全景（北から）
		2 溝10（北西から）
図版2	遺構	1 流路60（北西から）
		2 調査区西壁断面（東から）
図版3	遺物	流路60出土土器
図版4	遺物	溝10出土土器

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（北から）	3
図4	作業風景（北東から）	3
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図6	東壁断面図（1：80）	7
図7	西壁断面図（1：80）	8
図8	南壁断面図（1：80）	9
図9	遺構平面図（1：150）	10
図10	柱列37実測図（1：50）	11
図11	溝10実測図（1：80）	12
図12	建物27実測図（1：50）	13
図13	遺物実測図（1：4）	16
図14	流路70出土土器	18
図15	遺構変遷図（1：300）	20

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	15

平安京右京北辺二坊八町跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

京都市北区大將軍西町176番地において、集合住宅の新築工事が計画された。当地は平安京跡にあたることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）により試掘調査が実施された。その結果、正親町小路南側溝・土坑・流路などが検出され、平安時代の遺物が出土したことから、発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、三菱地所レジデンス株式会社から財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、文化財保護課の指導の下に実施することとなった。

今回の調査では、試掘調査や既往の調査成果に基づき、正親町小路の路面・側溝と小路に面した宅地内遺構の検出、および当地の土地利用の変遷を明らかにすることを目的とした。また、下層では、古墳時代の集落などが存在すると想定できたため、これらの確認も行うこととした。

(2) 調査経過

発掘調査は、2012年11月19日から開始した。調査対象地は南北65m×東西19mで、試掘調査の結果から対象地の南側に長方形の調査区（南北30m×東西11m）を設定した。

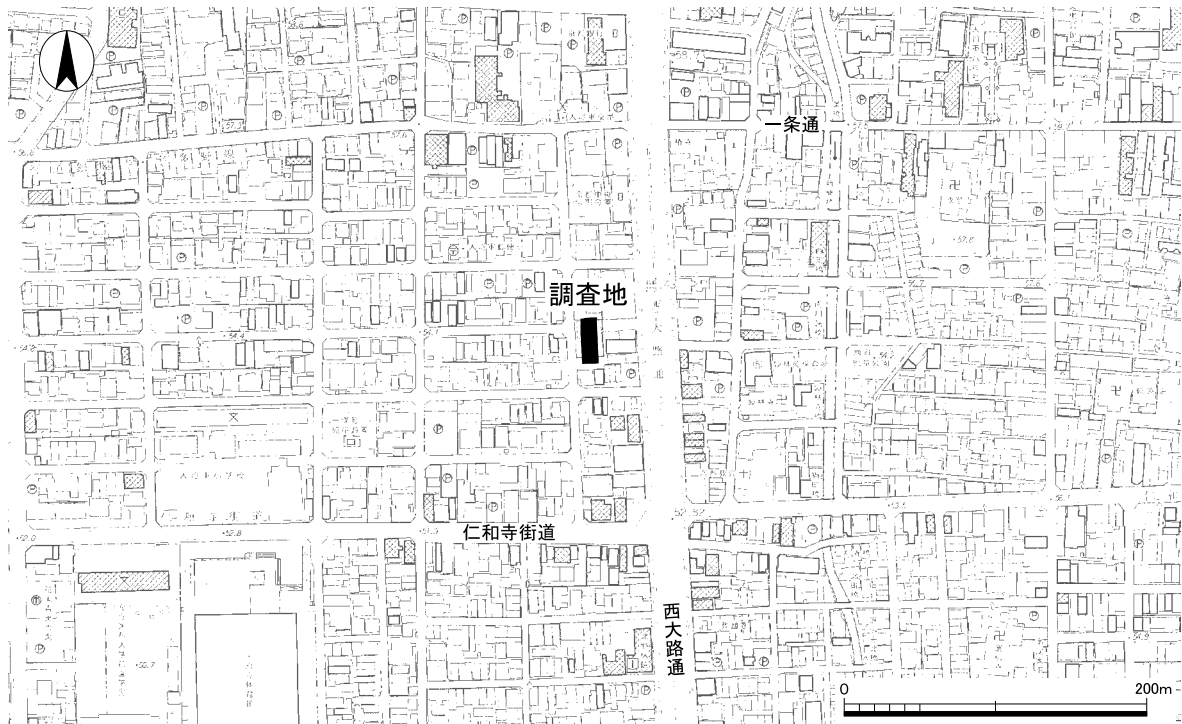


図1 調査位置図（1：5,000）

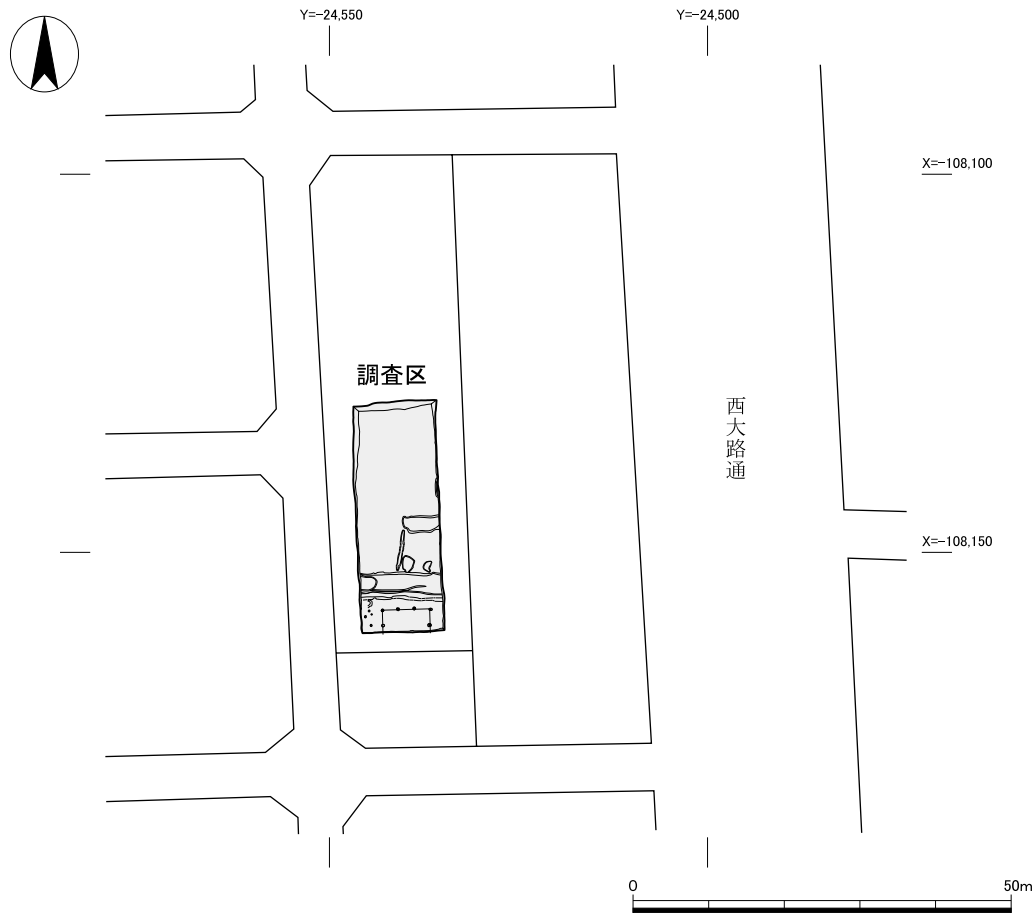


図2 調査区配置図（1：1,000）

発掘調査は、現地表下約0.15～0.9mまで重機掘削し、その後人力掘削によって調査を行った。調査は遺構を2時期に分けて実施した。まず、平安時代から近世の遺構を調査し、平面実測図・写真により記録を行った。次に飛鳥時代の遺構を調査し、平面実測図・写真記録を作成した。最後に、壁面沿いに断割調査により下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、12月28日に全ての調査を終了した。

調査中、文化財保護課の現地指導を11月20日、11月22日、11月28日、12月12日、12月17日の5回受けた。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、京都盆地の北西部に位置する。調査地の東約160mには、紙屋川が北から南に流れる。調査地は、旧紙屋川によって形成された扇状地上に立地し、一帯は北東から南西方向になだらかに傾斜する。ただし、調査地近辺では一条通から仁和寺街道の間が北から南に急激に傾斜する。

調査地北側には、弥生時代から室町時代の集落遺跡である北野遺跡がある。これまでの調査では、竪穴住居・建物・溝・流路などの遺構が検出され、弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。

当調査地は、平安京の右京北辺二坊八町にあたる。八町は、北を一条大路（現一条通）、西を道祖大路（現佐井通）、南を正親町小路、東を野寺小路（現西大路通）に囲まれた街区で、調査地はその南西部に位置する。平安時代の当地域に関する文献史料は確認できず、宅地内の状況については不明である。

平安時代中期以降については、遺構・遺物の検出地点が少なく、あまり利用されていない状況が窺える。中世における当地域に関する文献史料はなく、状況は不明である。桃山時代の天正19年（1591）には、調査地の東側に洛中を囲む西側の御土居が南北に築かれ、調査地周辺は洛外の耕作地となっていたことが知られる。その後、江戸時代には大將軍村として幕府直轄領となり、幕末には京都守護職知行であった。明治以降は市街化し、昭和6年（1931）には第二衣笠小学校（現大將軍小学校）が造られ、周辺は住宅地となり現在に至る¹⁾。

(2) 周辺の調査（図5）

調査地周辺では、これまで多くの発掘調査・立会調査が行われている。ここでは、主要な調査成果の概況について、平安京の条坊ごとに述べる。

北辺二坊

七・八町内では、立会調査が何度か行われたが、これまで発掘調査は実施されていない。



図3 調査前全景（北から）



図4 作業風景（北東から）

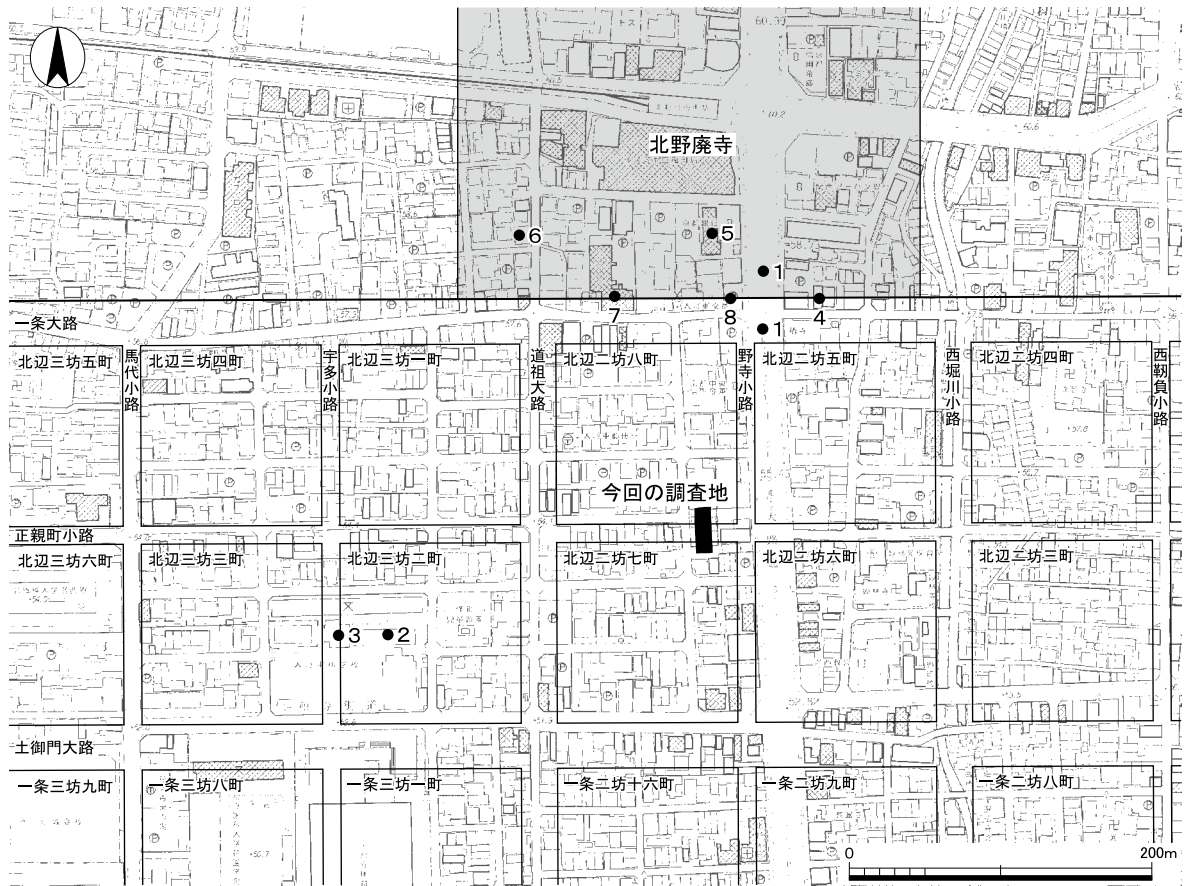


図5 周辺調査位置図（1：5,000）

八町北西側の発掘調査²⁾（図5-7、北野麩寺16次調査）では、平安時代前期から中期の一条大路北側溝と、その北側で平安時代の井戸・溝・土坑、中世の柱穴・土坑・整地層などが検出された。北側溝は、通常の大路側溝よりも規模が大きく（幅約12m）、平安京北限の堀状施設の可能性が指摘された。

八町北側の発掘調査³⁾（図5-5、北野麩寺11次調査）では、飛鳥時代から平安時代の自然流路、平安時代の土壇・柵・瓦溜などを検出した。自然流路（幅8m以上、深さ約1.2m）は南北方向でやや湾曲する。流路からは、飛鳥時代の土器・瓦、平安時代の土器・瓦が出土した。

八町北東側の発掘調査⁴⁾（図5-8、北野麩寺18次調査）では、奈良時代の南北流路、平安時代の一条大路北側溝、中世の土坑・溝などが検出された。奈良時代の南北流路（幅6.7m、深さ1.9m）からは多量の土器・瓦が出土した。この流路は北野麩寺7次調査で確認した瓦窯の南を流れる溝、11次調査で検出した溝に連続すると推定された。これら流路・溝などは、平安京造営直前に埋められたと考えられた。

五町北側の発掘調査⁵⁾（図5-1）では、顕著な遺構は検出されなかった。

五町北側の発掘調査⁶⁾（図5-4）では、古墳時代の東西流路、平安時代の一条大路路面・北側溝（幅1m以上、深さ0.3m）・柱列・集石遺構・土坑、鎌倉時代から室町時代の溝・柱列・柱穴・土坑などが検出された。一条大路は、平安時代前期から鎌倉時代まで継続し、北側溝からは、平安時代後期の土器類・瓦類が出土した。

北辺三坊

一町北東側の立会調査⁷⁾(図5-6)では、平安京道祖大路の北延長上で、路面と西側溝(幅0.5m、深さ0.3m)・柱穴・土坑、平安時代後期の南北溝、鎌倉時代前期の南北溝、室町時代の南北溝などが検出された。路面・西側溝は、平安時代中期から室町時代まで継続して造られ、平安京北郊外にまで平安京の条坊道路が延長したことが明らかとなった。

二町では、大將軍小学校内で2回の調査が実施された。西部の発掘調査⁸⁾(図5-2)では、弥生時代の溝、平安時代の井戸・溝・湿地、中世の東西柵・東西溝などが検出された。弥生時代の溝からは、弥生土器・木製品がまとめて出土し、周辺に当該期の集落が想定された。

西側の発掘調査⁹⁾(図5-3)では、平安時代の河川、江戸時代の土坑などが検出された。

註

- 1) 京都市編『史料 京都の歴史 第6巻北区』平凡社、1993年。鈴木久史「北野廢寺」『第19回京都府埋蔵文化財研究会 古代寺院と律令制下の京都府』京都府埋蔵文化財研究会研究会、2013年。などを参考にした。
- 2) 平尾政幸「平安京右京北辺二坊・北野廢寺」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1999年。
- 3) 本 弥八郎・木下保明「第11次調査」『北野廢寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
- 4) 吉川義彦・鈴木久史『北野廢寺発掘調査報告書』関西文化財調査会、2010年。
- 5) 『北野廢寺跡発掘調査報告』六勝寺研究会、1978年。
- 6) 堀内明博「平安京右京北辺二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局、1988年。
- 7) 小檜山一良「北野遺跡・北野廢寺2(97RH65)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局、1997年。
- 8) 「平安京右京北辺三坊二町」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年。
- 9) 吉崎 伸「右京北辺三坊(1)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1983年。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6～8)

調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、基本層序は以下のとおりである。

第1層は、地表面から0.15～0.9mまでである建物の解体などに伴う現代整地層である。第2層は、黒色砂泥を主体とする近世・近代遺物包含層で、厚さは0.1～0.45mである。第3層は、灰褐色泥砂を中心とする中近世の包含層で、調査区南部のみに残存する。厚さは0.1～0.25mである。第4層は、黒褐色土の平安時代遺物包含層で、溝10以南に残存する。厚さは0.1～0.3mである。第4層の下は、無遺物の地山層(第5層)である。地山は、灰白色粘土・黄灰色シルト・灰白色砂礫・黒ボク土などで構成され、場所によって異なる。

調査は、第4・5層上面を遺構面として、平安時代から近世と、飛鳥時代の遺構の2時期に分けて実施した。

調査区遺構面(第4・5層上面)の標高は、北端54.0m、中央部54.1m、南端54.0mであり、ほぼ平坦である。これに対し、調査地の標高は、北端で55.6m、南端で54.3mで、北から南へ約1.3m下り、調査区に西接する道路面も同様の勾配をなす。

(2) 遺構の概要 (表1)

調査で検出した遺構は、飛鳥時代1基、平安時代15基、中近世60基、その他に時期不明のものが3基あり、総計79基検出した。

近世以降の遺構は、全域で検出し、土坑・溝・柱穴・流路などがあるが、数は少ない。

中世の遺構は、全域で検出し、土坑・溝・柱列・柱穴・流路などがある。遺構は、調査区が狭いこともあり、規模や平面形は明らかでないものが多い。土坑は調査区全域で検出し、多くはゴミ処理用の穴と推定できる。流路は調査区北西部で検出し、調査区外に延長する。柱穴は調査区南部に散在する。

平安時代の遺構は、調査区南部で検出した。溝・土坑・柱穴・包含層などがある。柱穴は南端部でまとめて検出した。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
飛鳥時代	流路60	
平安時代	溝10・66、建物27、土坑78・41・57・64など	
中 世	流路70、柱列37、溝79・45・18・17・1・2・20・33、土坑62・59・61・42・67・22、柱穴など	
近 世	流路70、溝4・3、土坑7、柱穴など	

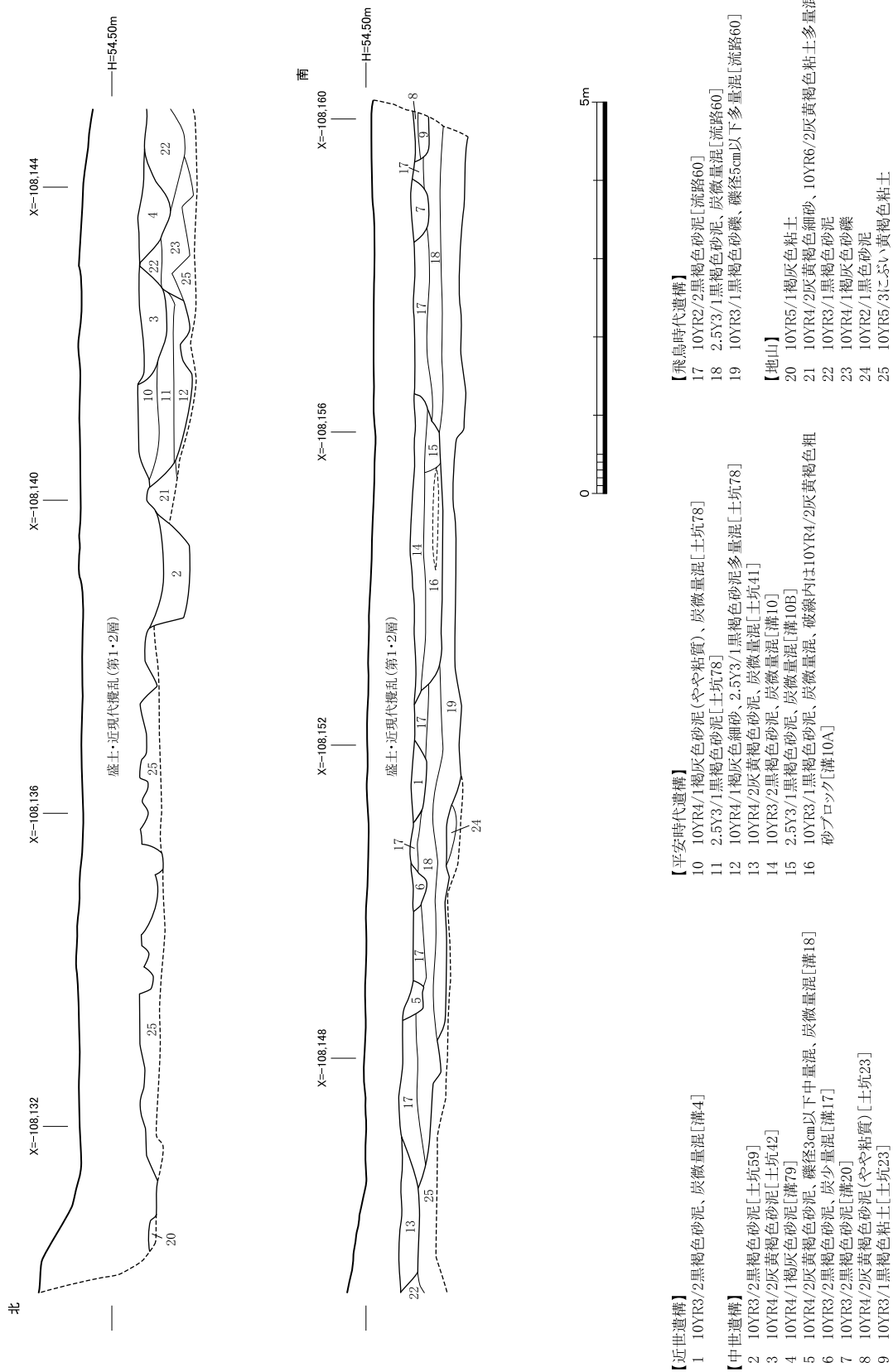
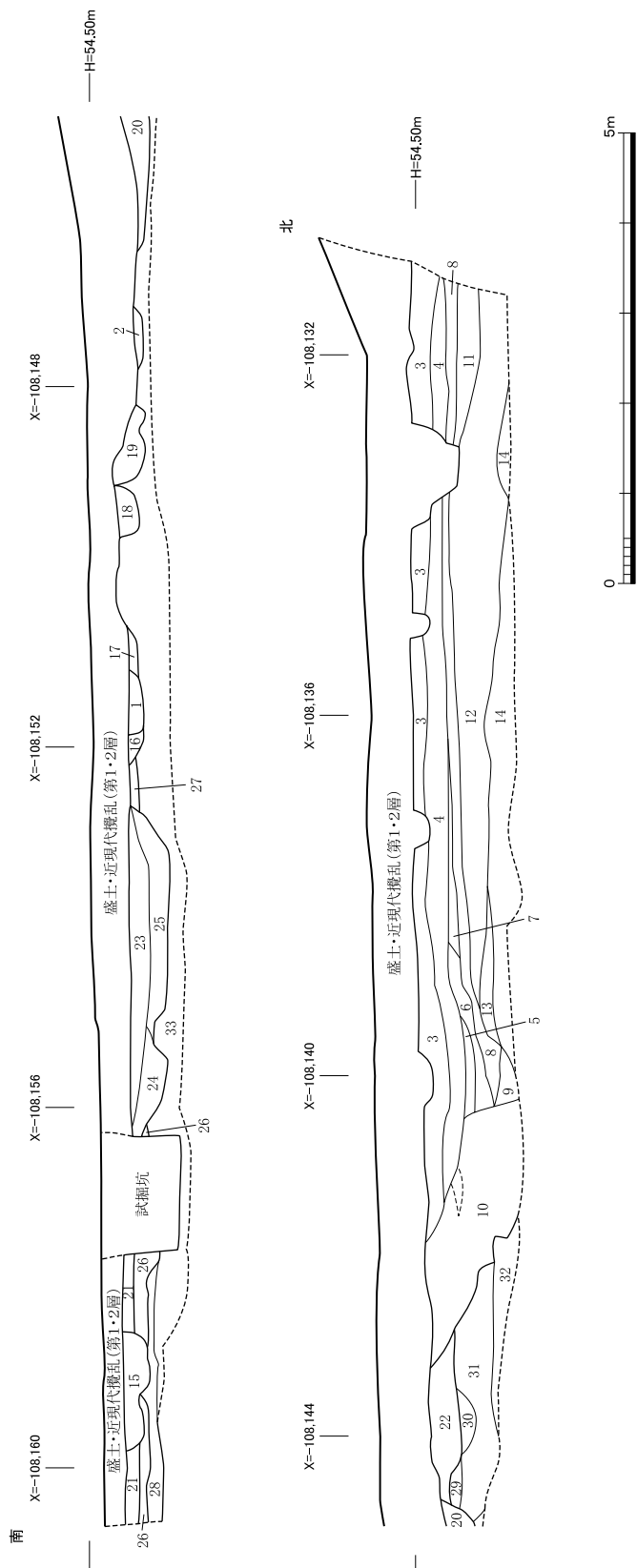


図6 東壁断面図 (1 : 80)



- 【平安時代包含層】(第4層)
- 26 10YR2/2黒褐色砂泥
 - 27 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 【地山】(第5層)
- 28 10YR4/2灰黄褐色砂
 - 29 10YR2/1黒色砂泥
 - 30 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - 31 2.5Y2/1黒色砂泥
 - 32 10YR4/2灰黄褐色粘土
 - 33 10YR6/2灰黄褐色砂泥

- 【中世遺構】
- 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥[溝2]
 - 16 10YR3/1黒褐色砂泥[ピット1]
 - 17 10YR3/3暗褐色砂泥[ピット4]
 - 18 10YR3/2黒褐色砂泥[溝17]
 - 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥[溝18]
 - 20 10YR3/2黒褐色砂泥[土坑22]
- 【中世包含層】(第3層)
- 21 2.5Y3/1黒褐色砂泥、炭少量混
 - 22 10YR3/3暗褐色砂泥
- 【平安時代遺構】
- 23 10YR2/3黒褐色砂泥[溝10]
 - 24 2.5Y3/1黒褐色砂泥、炭少量混[溝10B]
 - 25 10YR2/2黒褐色砂泥[溝10A]

- 【近世遺構】
- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混、平安時代の遺物少量混[溝4]
 - 2 10YR3/2黒褐色砂泥[土坑7]
- [流路70]
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭微量混、平安時代の遺物多量混
 - 4 10YR2/3黒褐色砂泥
 - 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - 6 10YR4/2~5/2灰黄褐色砂泥、礫径7cm以下少量混
 - 7 10YR2/3黒褐色砂泥
 - 8 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - 9 10YR4/1褐灰色粗砂
 - 10 10YR6/3こぶい黄褐色砂礫、礫径15cm以下多量混、破線内は10YR4/2灰黄褐色細砂ブロック
 - 11 2.5Y3/1黒褐色粘土
 - 12 10YR4/2灰黄褐色砂礫、礫径5cm以下多量混
 - 13 10YR4/1褐灰色粘土
 - 14 10YR3/1黒褐色粘土

図7 西壁断面図 (1:80)

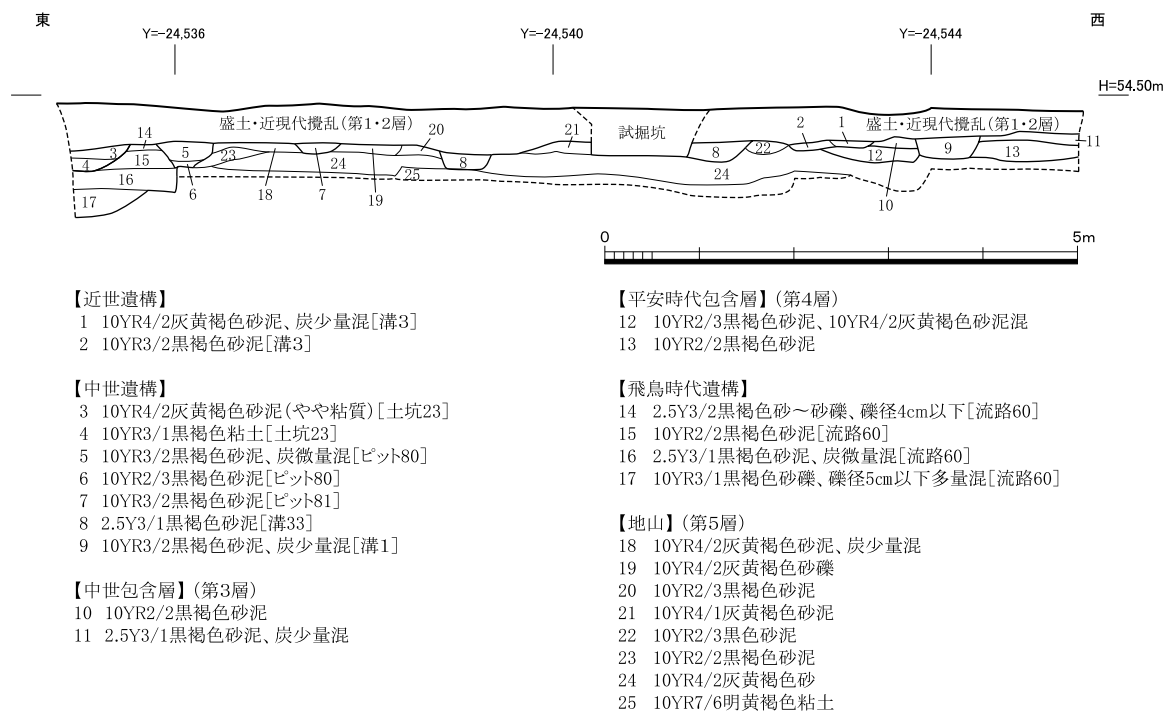


図8 南壁断面図(1:80)

飛鳥時代の遺構は、調査区南東部で流路を検出した。

遺構分布をみると、中世以降の遺構が調査区全域に分布するのに対し、平安時代以前の遺構や包含層は調査区南部に集中する。このことから考え、本来の平安時代以前の地形は、周辺の地形と同様に北から南に向かう傾斜面として復元でき、中世・近世以降に北部が削平され、平坦になったと推定できる。

以下、各時期に分けて主要な遺構について報告する。遺物の時期は、田辺昭三による須恵器編年¹⁾、および平安京・京都I期～XIV期編年案²⁾などに準拠する。

(3) 中世以降の遺構

流路70 調査区北西部で検出した流路である。方向は北東から南西方向に湾曲する。北側および西側は調査区外に継続する。検出面での規模は、南北約12m、東西約4m確認し、深さは1.5m以上である。肩口は、ほぼ垂直に下がる箇所と緩やかに傾斜する箇所がみられ、底面は凹凸がある。埋土は大きく3層に分かれ、上層は灰黄褐色シルト、中層は黒褐色砂泥、下層は灰黄褐色砂泥・黒褐色砂泥・褐灰色粗砂・褐灰色粘土・黄褐色砂礫が互層となり、南肩口部・東肩口部には拳大の礫を含む黄褐色砂礫が堆積する。堆積の状況から、下部は急に堆積し、上部の凹みとして残った部分は徐々に埋没した状況が窺える。埋土上層から土師器皿・甕、黒色土器碗、須恵器杯・皿・円面硯・甕、緑釉陶器皿、灰釉陶器皿・段皿などが出土した。中層は遺物を含まない。下層からは土師器片などが少量出土した。上層から中世・近世の遺物が出土したが、平安時代の遺物も比較的多く出土している。

土坑62 調査区北部で検出した土坑で、西側は後世の遺構により失われる。平面形は不定形で、

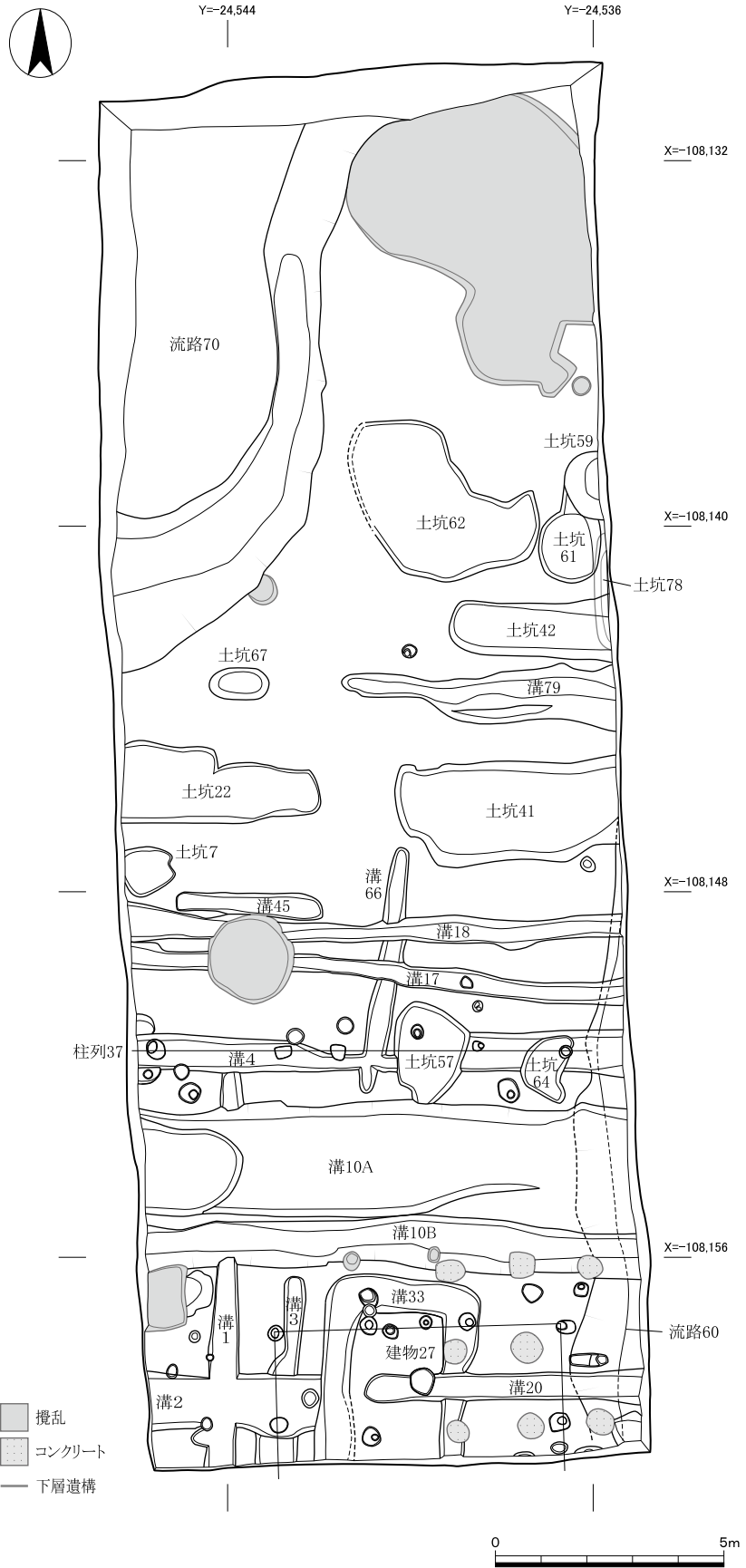


図9 遺構平面図 (1 : 150)

東西3.2m以上、南北約3.5m、深さ約0.2mである。壁はなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は黒色砂泥である。埋土中から土師器皿・甕、施釉陶器鉢・おろし皿、瓦器羽釜、須恵器甕などが出土した。遺物の時期は京都Ⅷ期（室町時代）である。

土坑42 調査区中央部東側で検出した土坑で、東側は調査区外へ広がる。平面形は不定形で、検出面での規模は、東西3.3m以上、南北1.2m、深さ0.35mである。壁はなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は褐灰色砂泥で、炭・土器片を微量含む。埋土中から土師器皿・甕、施釉陶器碗、須恵器甕、陶器甕、白磁碗、瓦などが出土した。遺物の時期は室町時代である。

溝79 調査区中央部東側で検出した溝で、東側は調査区外へ延長する。検出面での規模は、東西6m以上、南北1.3m、深さ0.3mで、西側は調査区内で立ち上がる。壁はなだらかに傾斜し、底面はやや凹凸がある。埋土は褐灰色砂泥で、炭・土器片を微量含む。埋土中から土師器皿・甕などが出土した。遺物の時期は中世である。

土坑22 調査区中央部で検出した土坑で、西側は調査区外に広がる。平面形は長方形で、検出面での規模は、東西4.2m以上、南北約1.8m、深さ約0.2mである。壁はなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂泥である。埋土中から土師器皿・甕、施釉陶器碗・皿、須恵器壺・甕などが出土した。遺物の時期は中世である。

溝33 調査区南部で検出した溝である。平面形は南に開く「コ」の字型を呈する。検出面での規模は、東西幅3.4mで、南北4m確認した。溝幅約0.7m、深さ約0.1mである。壁はなだらかに傾斜し、断面U字形である。埋土は黄褐色砂泥である。埋土中から土師器皿・甕、施釉陶器、須恵器甕、白磁・青磁などが出土した。遺物の時期は中世である。

柱列37 (図10) 調査区中央部で検出した東西柱列である。溝4の底面で検出した。柱間隔は2.9m・1.2

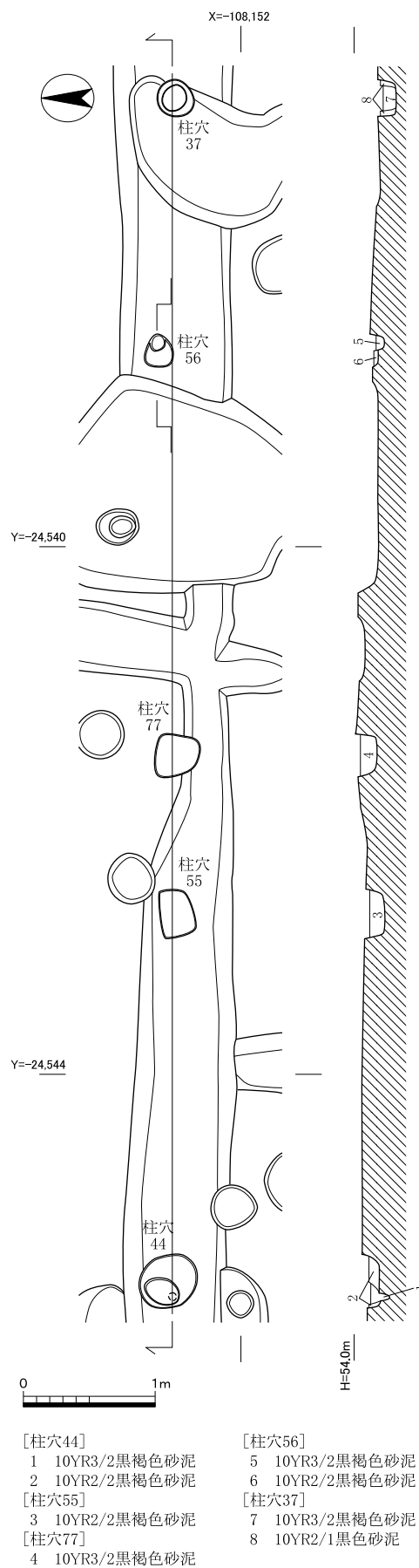


図10 柱列37実測図 (1:50)

m・3.0m・1.9mと不揃いである。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、径0.2～0.4m、深さ約0.15mである。埋土は黒褐色砂泥で、埋土から土器片が微量出土した。時期は明確ではないが、埋土の状態や主軸方向の振れなどから中世と推定できる。

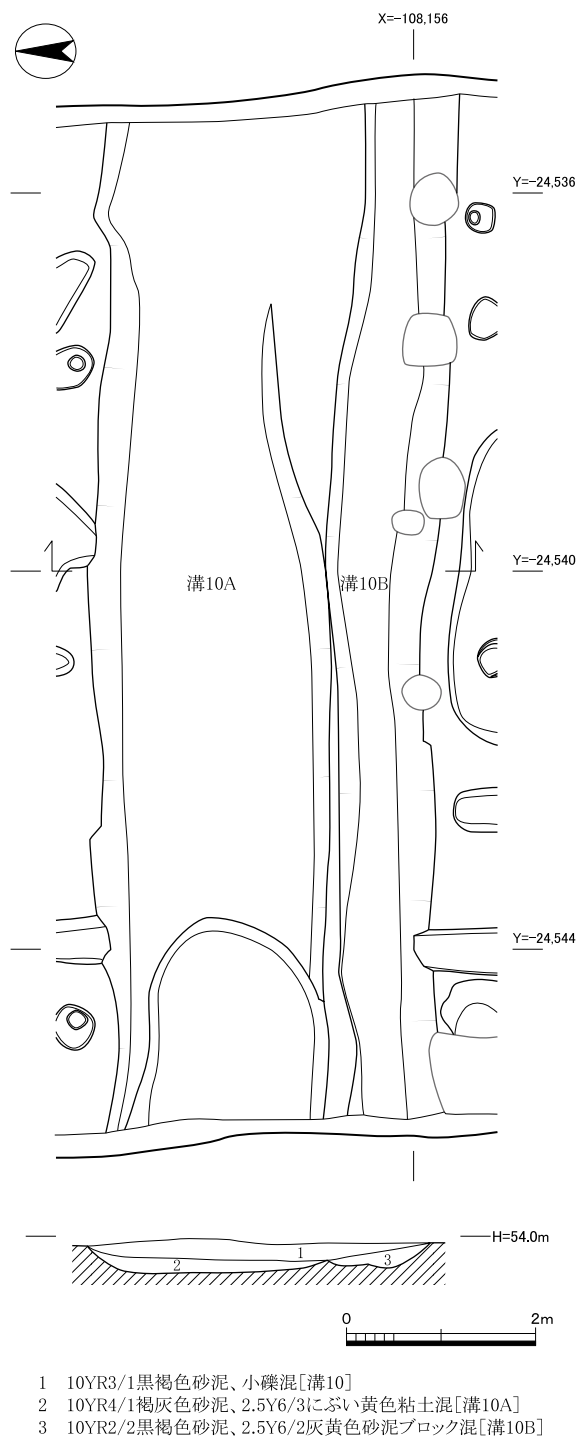
溝群（溝1・2・20・17・18・45） 調査区南半部で検出した溝群である。方向は東西・南北方向を示すものがあり、重複する箇所がある。検出面での規模は、幅1.1～0.4m、深さ約0.1mである。壁はなだらかに傾斜し、断面U字形である。埋土は灰黄褐色砂泥を中心とし、土器片を含む。

溝20埋土中から土師器皿・甕、施釉陶器、瓦器鍋などが出土した。遺物の時期は京都Ⅷ期（室町時代）である。

柱穴群 調査区南半部で検出した柱穴群である。平面形は円形ないし楕円形が多く、径0.25～0.5m、深さ0.1～0.3mである。埋土は灰黄褐色砂泥を中心とし、埋土から土器片が微量出土した。柱穴はまとまらず建物の復元はできない。時期は明確ではないが、埋土の状況から中世と推定できる。

（4）平安時代の遺構

溝10（図11、図版1-2） 調査区南部で検出した東西方向の溝である。東西はさらに調査区外に延長する。検出面での規模は、南北幅3.4m、深さは0.35mである。両肩口はなだらかに傾斜する。南肩口に沿って底部が幅約0.5mで溝状に凹む（溝10B）。断面観察の結果、溝下半（溝10A）が埋没後、新たに溝10Aの南肩口に沿って溝10Bが掘削されたと考えられる。底面の標高は、西端53.6m、東端53.6mで、ほぼ水平を示す。埋土は大きく3層に分かれ、上層は黒褐色砂泥、下層は褐灰色砂泥である。底部には微砂層がレンズ状に堆積し、水流があったことが確認できる。埋土は次第に埋没したと考えられる。各層に含まれる遺物は時期差がほとんど認められない。埋土から土師器皿・甕、須恵器杯・蓋・鉢・甕・壺・風字硯、黒色土器碗・皿・鉢、緑釉陶器皿・碗、灰釉陶器皿・段皿・



- 1 10YR3/1黒褐色砂泥、小礫混[溝10]
- 2 10YR4/1褐灰色砂泥、2.5Y6/3にぶい黄色粘土混[溝10A]
- 3 10YR2/2黒褐色砂泥、2.5Y6/2灰黄色砂泥ブロック混[溝10B]

図11 溝10実測図（1：80）

椀・壺、白色土器椀、製塩土器、丸瓦・平瓦などが出土した。遺物の時期は平安京Ⅱ期新～Ⅲ期古（平安時代中期）に属する。

土坑41 調査区中央部東側で検出した土坑で、東側は調査区外へ広がる。平面形は不定形で、検出面での規模は、東西4.8m以上、南北約2m、深さ0.25mである。壁はなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂泥である。埋土から土師器皿・甕、須恵器杯・四耳壺・甕・壺・転用

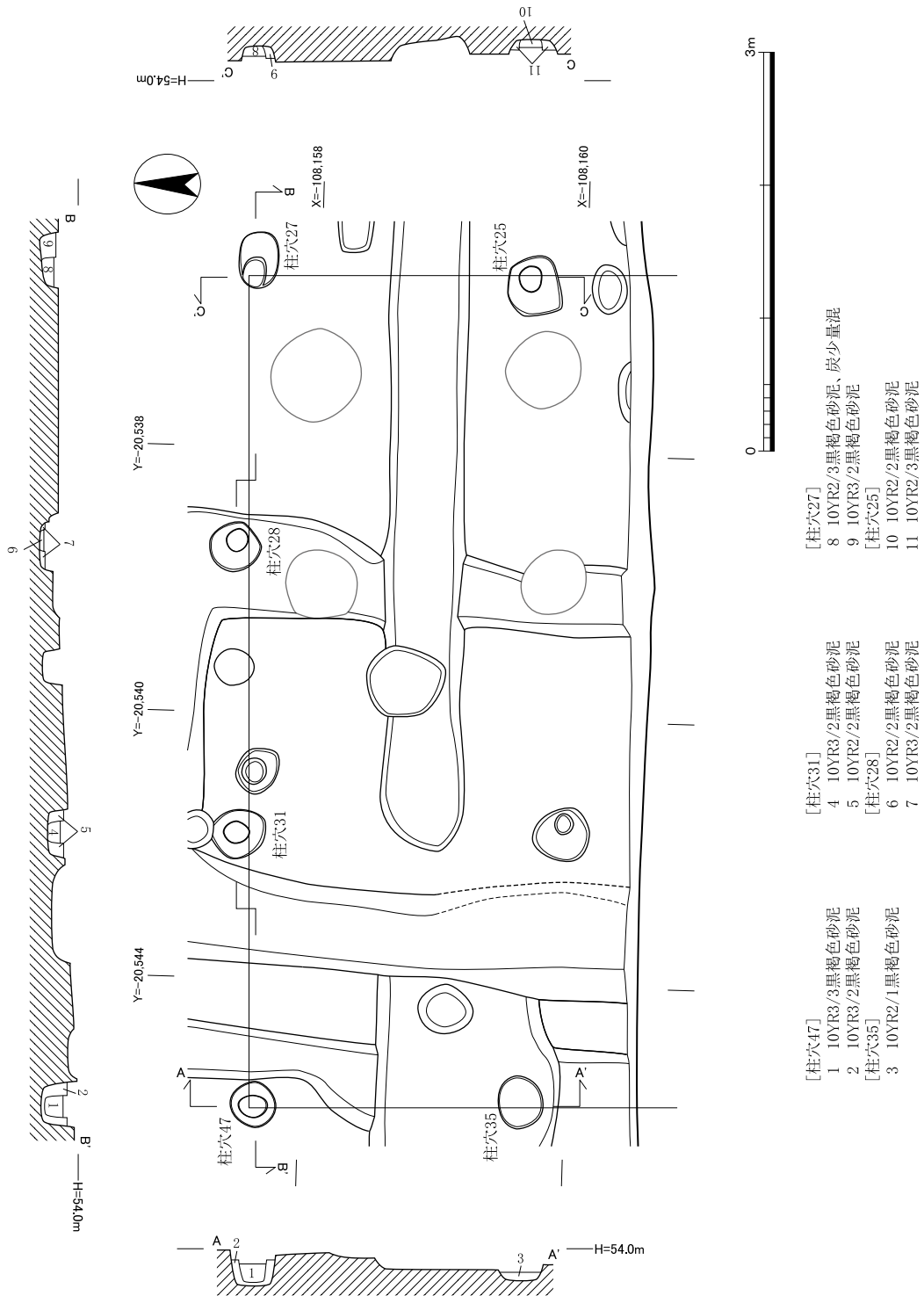


図12 建物27実測図 (1 : 50)

硯、黒色土器椀、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・壺、平瓦などが出土した。遺物の時期は平安京Ⅲ期（平安時代中期）に属する。

土坑57 調査区中央部南半で検出した土坑である。中央は溝4に切り込まれる。平面形は不定形で、検出面での規模は、東西1.6m、南北2.2m、深さ0.1mである。壁はなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は黒色砂泥である。埋土から土師器皿・甕、黒色土器椀、須恵器壺・甕などが出土した。遺物の時期は平安京Ⅲ期（平安時代中期）に属する。

建物27 (図12) 調査区南部で検出した掘立柱建物である。柱穴は平安時代包含層の下で検出した。建物は東西棟で桁行3間、梁間1間以上である。桁行は2.1m・2.2m・2.0mとやや不揃いである。梁間は西側で2.0m、東側で2.1mである。方向はほぼ座標北を示す。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、径0.2～0.3m、深さ約0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で、埋土から土器片が微量出土したが、時期は明確ではない。

(5) 飛鳥時代の遺構

流路60 (図版2-1) 調査区南東部で検出した流路である。方向は北東から南南西を示す。流路東半は調査区外に継続する。検出面での規模は、東西幅1.5m、南北長1.4m、深さ0.7m確認した。西壁は急に傾斜し、底面は凹凸がある。埋土は大きく2層に分かれ、上層は黒褐色砂泥で遺物は少ない、下層は径0.1mまでの礫を多く含む黒褐色砂泥で遺物はやや多い。埋土中に砂層がレンズ状に堆積し、水流の痕跡が認められる。堆積の状況から、下部は急に堆積したと考えられ、上部は次第に埋まった状況が窺える。各層に含まれる遺物は時期差がほとんど認められない。埋土からは土師器椀・甕・鉢・高杯、須恵器杯・壺・甕、丸瓦・平瓦などが出土した。遺物の時期は飛鳥時代に属する。

註

- 1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱にして13箱出土した。大半が土器類で、瓦類は少量である。遺物の時期は、飛鳥時代と平安時代・中世以降のものがある。中世以降のものが最も多く、他の時代の遺物は少ない。

飛鳥時代の遺物には、土師器・須恵器があり、丸瓦・平瓦が少量含まれる。流路60から集中して出土した。平安時代の遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器があり、丸瓦・平瓦が極わずか含まれる。溝10から出土したほか、包含層や中世以降の遺構からも出土した。中世以降の遺物には、土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器などがあり、各遺構から出土した。土器類は、ほとんどが小片で図示できたものは少ない。

(2) 出土遺物

流路60出土土器 (図13、図版3) 1～3は土師器碗Cである。体部は内湾して開き、口縁部はやや外反し、1は端部を丸く収め、2は端部がわずかに屈曲する。3は端部内側に段がある。1は体部外面オサエ、口縁部内外面・体部内面横ナデである。2は体部外面ケズリ、口縁部内外面・体部内面横ナデである。体部・口縁部内面に放射状暗文を施す。3は体部外面ケズリ、口縁部内外面・体部内面横ナデ、口縁部・体部外面にヘラミガキ、体部内面に放射状暗文、口縁部内面に斜方向暗文を施す。

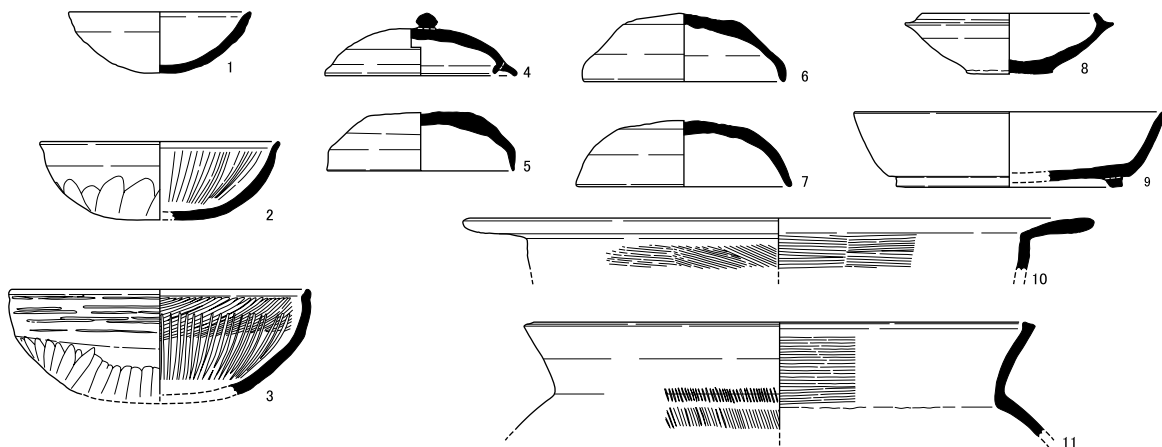
4は須恵器杯G蓋である。天井部は盛り上がり、口縁部は屈曲して内湾し、内面に返りがある。天井部外面に宝珠形のつまみが付く。天井部外面は回転ケズリ、内面はナデ、口縁部内外面回転ナデである。5～7は須恵器杯H蓋である。天井部は平坦で、口縁部は内湾気味に垂下する。天井部外面は不調整、内面はナデ、口縁部・体部内外面は回転ナデである。8は須恵器杯H身である。底

表2 遺物概要表

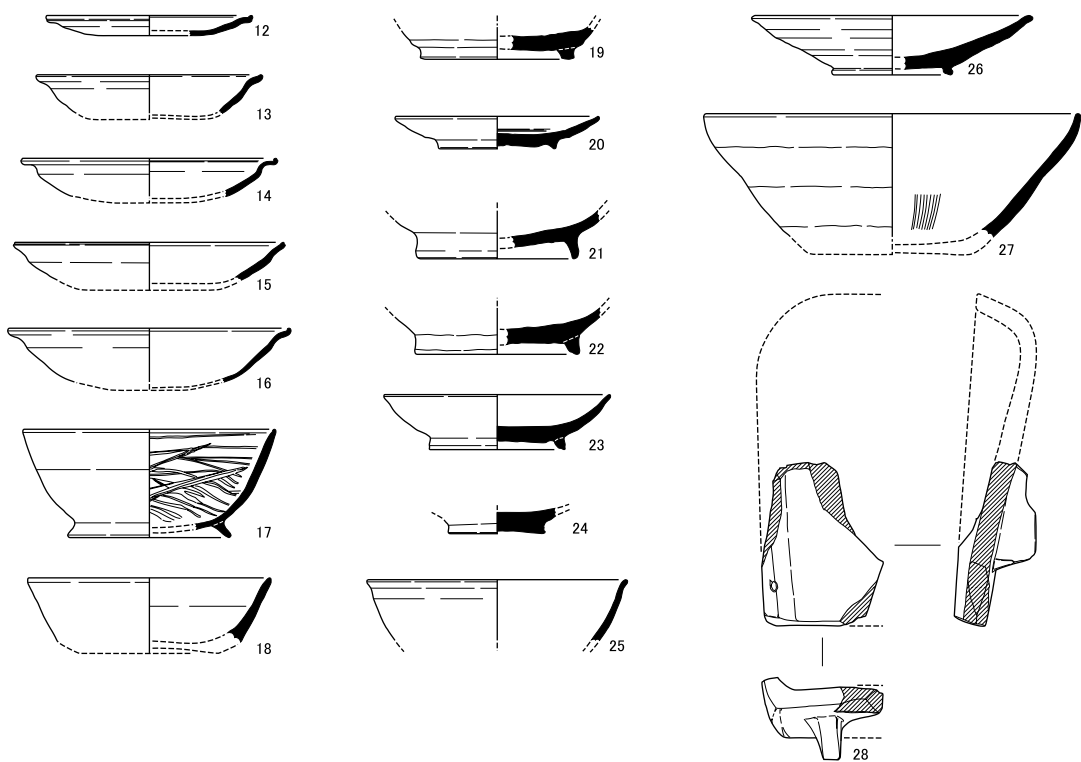
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代	土師器、須恵器、瓦		土師器5点、須恵器6点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器		土師器7点、須恵器7点、緑釉陶器4点、灰釉陶器3点、黒色土器1点		
中世	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器		土師器1点		
近世	土師器、陶器、磁器				
合計		14箱	34点(1箱)	0箱	13箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

流路60



溝10



流路70

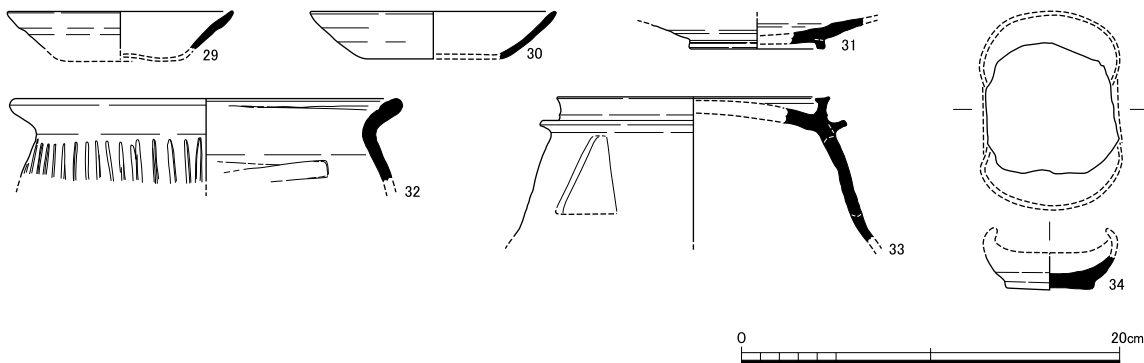


图13 遺物実測図 (1 : 4)

部は平坦で、体部は内湾し、受け部は水平に張り出し、立ち上がりは内傾する。底部外面は不調整、内面はナデ、口縁部・体部内外面は回転ナデである。9は須恵器杯B身である。底部は平坦で体部・口縁部は外上方に開き、端部は丸く収める。底部縁に断面台形の高台が付く。底部外面はナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。

10は土師器鍋である。体部は内湾し、口縁部は水平方向に開く。体部内面は横ハケ、体部外面ハケメ、口縁部内外面横ナデである。11は土師器甕である。肩部は内湾し、口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は肥厚する。体部内面は横ナデ、外面は縦ハケである。口縁部外面横ナデ、内面横ハケである。

遺物の時期は、TK217～TK48型式に属する。

溝10出土土器(図13、図版4) 12～16は土師器皿である。体部は内湾気味に開き、口縁部は外傾し、口縁端部は肥厚する。器壁は薄い。体部外面はオサエ、体部内面・口縁部内外面は横ナデである。

17は黒色土器椀である。体部は底部から内湾気味に開き、口縁部は外上方に開く。体部外面はオサエ、体部内面・口縁部内外面は横ナデ、体部・口縁部内面に粗いヘラミガキを施す。内面のみ黒色化する。

18は須恵器杯Aである。体部・口縁部は外上方に開く。体部・口縁部内外面回転ナデである。19は須恵器杯Bである。底部は平坦で、体部は外上方に開く。底部外面に断面台形の高台が付く。底部外面ナデ、底部内面・体部内外面回転ナデである。20は須恵器段皿である。底部は平坦で、体部・口縁部は内湾気味に開く。底部外面に断面三角形の高台が付く。底部外面回転糸切り、底部内面・体部口縁部内外面回転ナデである。21は須恵器椀である。底部は平坦で、体部は内湾気味に開く。底部外面に断面三角形の高台が付く。底部外面ケズリ、底部内面・体部内外面回転ナデである。

22は緑釉陶器椀である。底部は平坦で、体部は内湾気味に開く。底部外面に断面台形の高台が付く。高台端部内面は凹線が巡る。底部外面糸切り、底部内面・体部内外面回転ナデである。内外面に濃緑色の釉薬を施す。23は緑釉陶器皿である。底部は平坦で、体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。底部外面に断面台形の高台が付く。高台端部内面は凹線が巡る。底部外面ナデ、底部内面・体部口縁部内外面回転ナデである。内外面に淡緑色の釉薬を施す。24は緑釉陶器耳皿である。底部外面はやや凹み、体部は内湾気味に開き、両端を内側に曲げる。底部外面糸切り、底部内面・体部内外面回転ナデである。底部外面を除き内外面に濃緑色の釉薬を施す。

25は灰釉陶器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに開く。体部口縁部内外面回転ナデである。内面に釉薬を施す。26は灰釉陶器皿である。底部は平坦で、体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。底部外面に断面台形の高台が付く。底部外面ナデ、底部内面・体部口縁部内外面回転ナデである。

27は土師器鉢である。体部は外上方に開き、口縁部は立ち上がる。体部外面はオサエで、粘土紐の継ぎ目残存。体部内面・口縁部内外面横ナデで、体部内面にハケメが付く。

28は須恵器風字硯である。底部は平坦で、口縁部は開き気味に立ち上がる。底部両端に直立の脚

が付く。底部外面ナデ、口縁部内外面横ナデである。脚部側面ナデ、端面ケズリである。

19・26・28は平安京Ⅱ期、他は平安京Ⅱ期新～Ⅲ期古に属する。

流路70上層出土土器（図13・14） 29は土師器皿である。体部は開き、口縁部はやや屈曲する。体部外面はオサエ後ナデ、体部内面・口縁部内外面横ナデである。

30は須恵器杯Aである。体部・口縁部は外上方に開く。体部・口縁部内外面回転ナデである。

31は灰釉陶器段皿である。底部は平坦で、体部は開き、内面に段がある。底部外面に台形高台あり。底部外面ナデ、底部内面・体部外面回転ナデである。内面に釉薬を施す。

32は土師器甕である。口縁部は屈曲して開き、端部は肥厚する。体部内面ケズリ、外面平行タタキ。口縁部内外面横ナデである。

33は須恵器円面硯である。天井部はやや盛り上がり、口縁部は直立し、脚部との境に鏝あり。脚部は外下方に開き、台形透かし穴6箇所あり。天井部内面ナデ、口縁部・鏝部・脚部内外面は回転ナデである。

34は緑釉陶器耳皿である。底部外面はやや凹み、体部は内湾気味に開き、両端を内側に曲げる。底部外面糸切り、底部内面・体部内外面回転ナデである。底部外面を除き内外面に濃緑色釉薬を施す。

29は京都Ⅸ期、他は平安京Ⅱ期新～Ⅲ期古に属する。



図14 流路70出土土器

5. まとめ

今回の調査では、飛鳥時代から近世の遺構を検出した。ここでは、周辺の調査成果も含め、各時期ごとに変遷をまとめる（図15）。

飛鳥時代 飛鳥時代の遺構には、流路60がある。方向は北東から南西方向で、当地域の一般的な自然流路と同様で、堆積状況からも自然流路と考えられる。調査地北には、飛鳥時代に北野廃寺が創建され、周辺に集落が展開したことが知られ、流路60から当該期の遺物が出土したことから、調査地周辺に集落が存在したことが推定できる。

平安時代 溝10は、平安京の正親町小路南側溝推定位置に相当する。路面および北側溝などの関連施設は未検出である。前述したように、調査区の北半は中・近世以降に削平を受け、北側溝や関連施設は削平されたと推定できる。埋土中からは、平安時代前期から中期の遺物が出土し、当該期には埋没する。溝10A・Bを含めた溝幅は、約34mある。このうち溝10Aの現存幅は約2.5mあり、『延喜式』『左右京職』京程より規模が大きいことが判明した。平安京の東西方向の条坊路では、北側溝よりも南側溝の方が規模が大きい例が多く、今回も同様の事例といえよう。特に当調査地周辺の地形を勘案すると、南側溝が大きいのも納得できよう。

調査地周辺では、右京北辺二坊五町・八町北西側の発掘調査で一条大路が確認され、当地域では平安時代前期から条坊が施工されたことが明らかとなった。

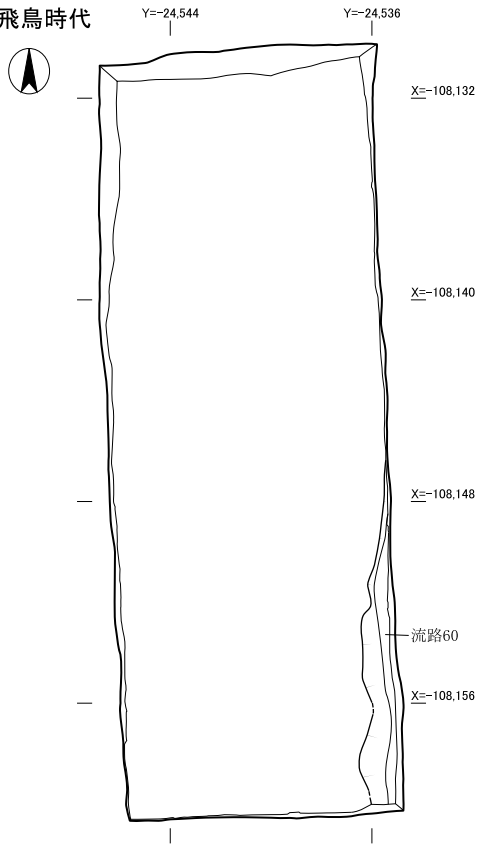
なお、平安時代後期の遺構は検出していない。

中世以降 調査地では、鎌倉時代の遺構・遺物は検出しなかった。周辺の調査でも鎌倉時代の遺構・遺物の分布密度は低く、当地域の利用が低調であったことを示唆している。

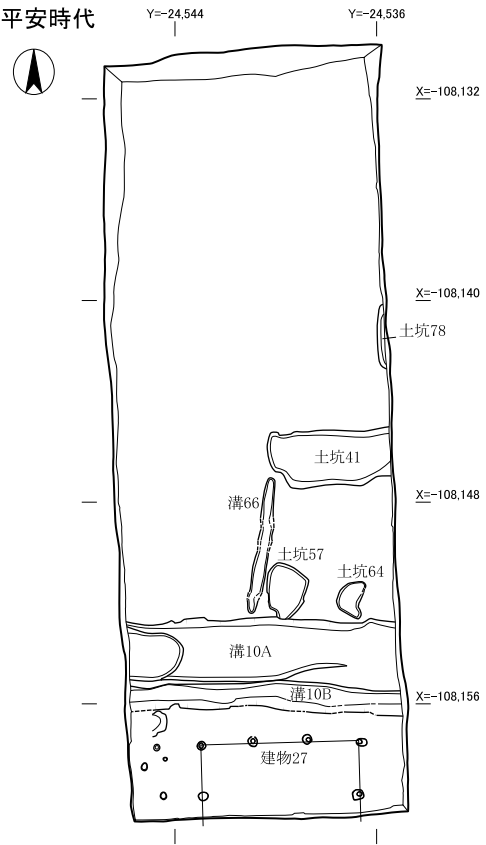
室町時代になると、調査地の様相は変わり、遺構・遺物共に増加する。東西・南北方向の小溝が数多く造られ、耕作に関係した利用が推定できる。調査区中央部では、前代の正親町小路側溝北寄り東西柱列37を検出した。平安時代の道路が失われても、その位置が境界として意識されていたことを窺わせる。

さらに近世には、柵の跡に東西溝4が造られ、境界としての意識は残るが、調査区北西側では、中世から近世の湾曲する流路を検出し、当該期にはここは河川の氾濫原となっていた状況が想定できる。

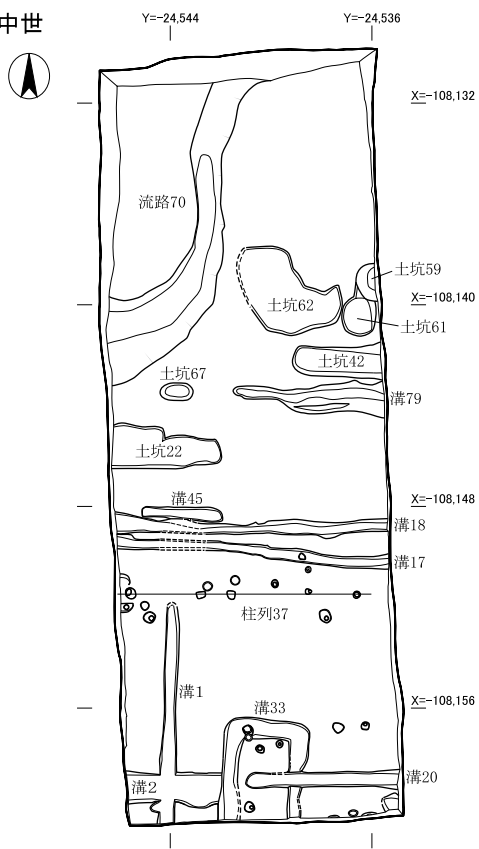
飛鳥時代



平安時代



中世



近世以降

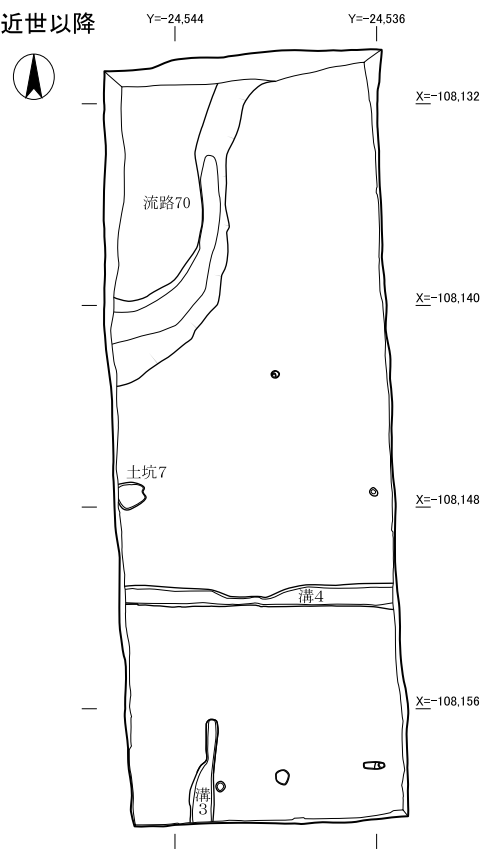


図15 遺構変遷図 (1 : 300)

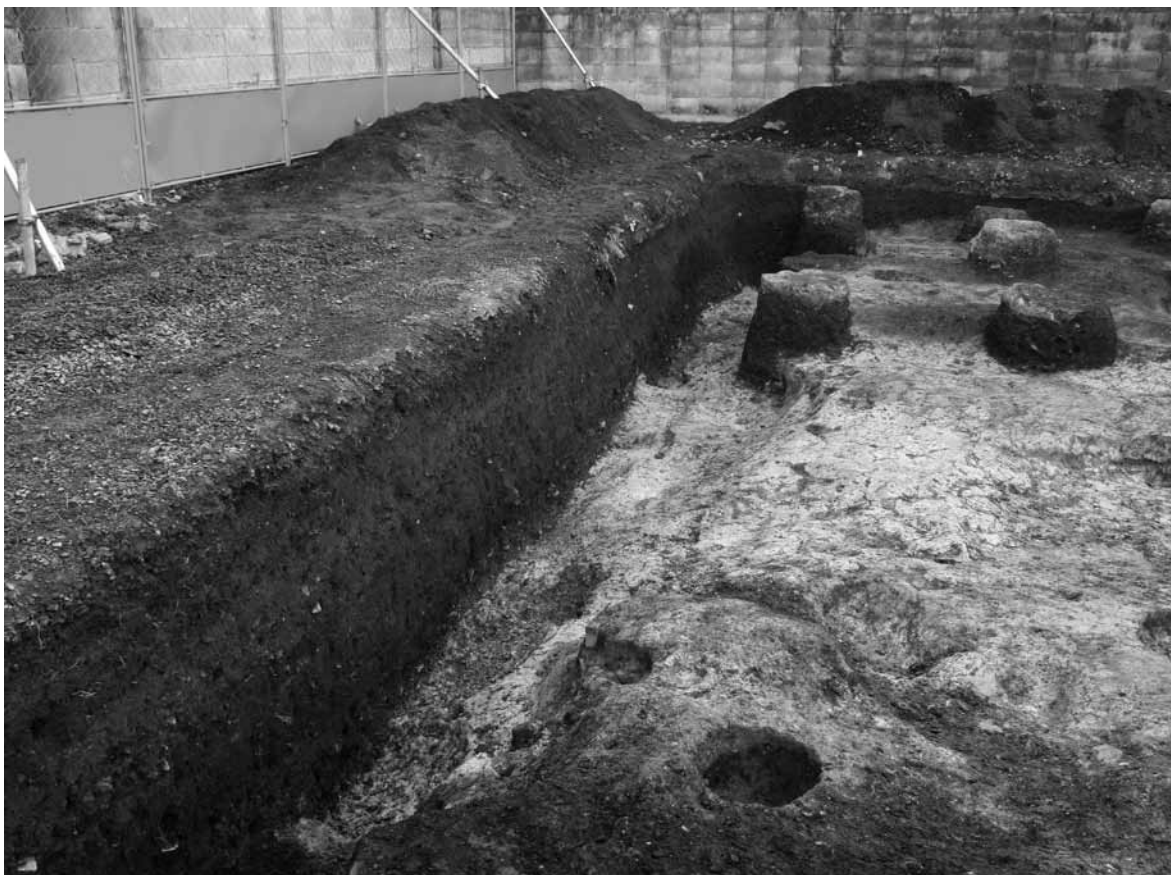
圖 版



1 調査区全景（北から）



2 溝10（北西から）



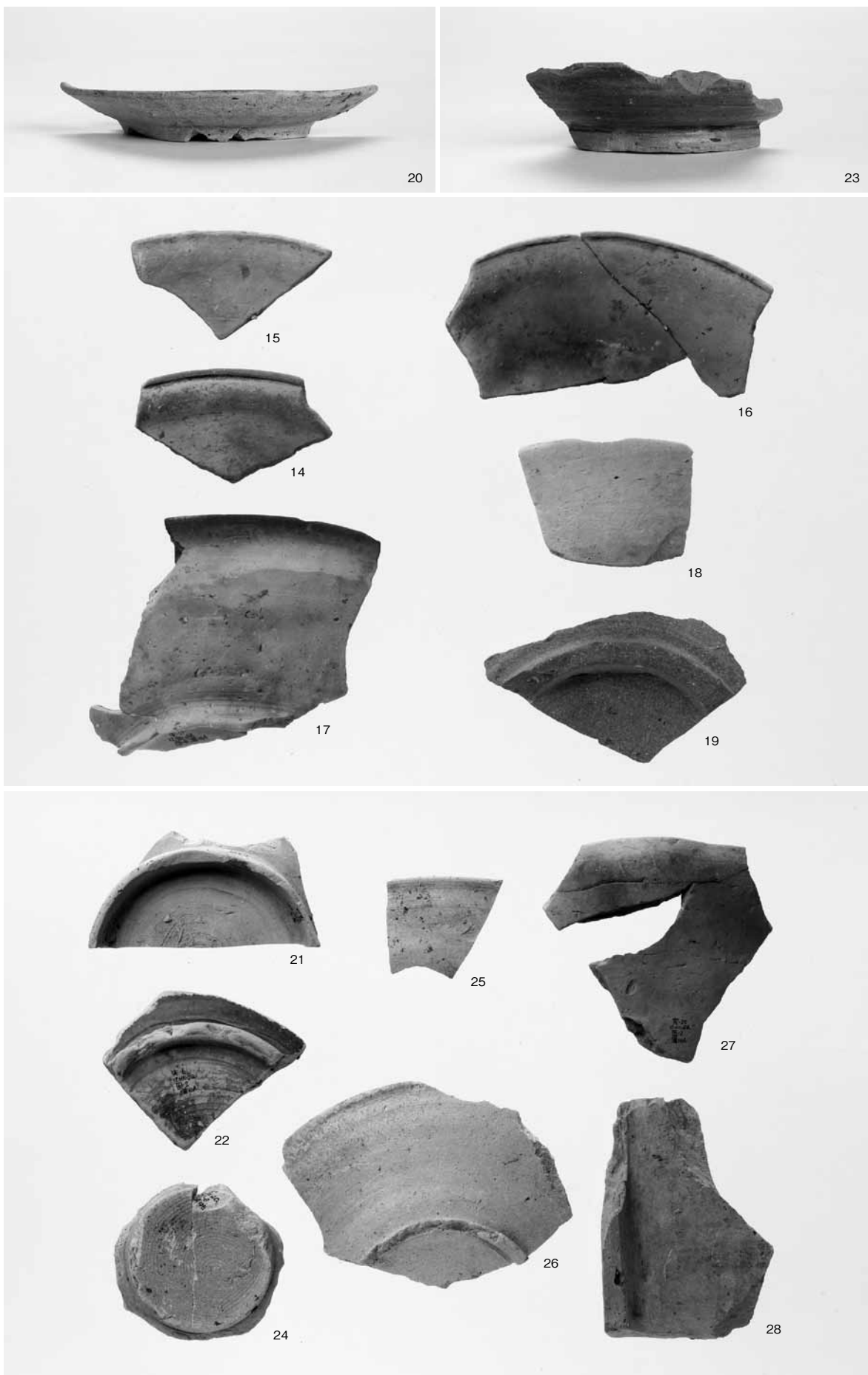
1 流路60（北西から）



2 調査区西壁断面（東から）



流路60出土土器



溝10出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうほくへんにぼうはっちょうあと							
書名	平安京右京北辺二坊八町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-18							
編著者名	上村和直							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしきたく 京都市北区 たいしょうぐんにしまち 大將軍西町176	26100	1	35度 01分 30秒	135度 43分 52秒	2012年11月 19日～2012 年12月28日	330㎡	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	飛鳥時代	流路	土師器、須恵器、平瓦		飛鳥時代の南北流路を検出した。 平安時代の正親町小路南側溝を検出した。		
		平安時代	溝、建物	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、平瓦				
		中世	溝、柱穴、柱列、土坑、流路	土師器、須恵器、国産陶磁器、瓦、焼締陶器、輸入陶磁器				
		近世以降	溝、土坑、流路	土師器、国産陶磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-18

平安京右京北辺二坊八町跡

発行日 2013年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961